（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　荒谷大輔

ベルクソンの主著『物質と記憶』は、なお解釈が一定しない一書である。そのことは、『物質と記憶』の中心概念である「イマージュ」についても当てはまる。実際ベルクソンは、イマージュは「感覚を開いたときには知覚され、閉じたときには知覚されない」存在であると書くことでイマージュの観念論的な性格を主張する一方で、イマージュは「知覚する意識とは無関係に存在する」ものであると記すことで、その実在論的な性格を強調する。ベルクソン自身の、一見矛盾した説明が、整合的な理解を阻んできたのである。

本論文はまず「序論」で『物質と記憶』の解釈史を辿りながら、イマージュをめぐる統一的な理解を追及すべきことを宣言する。荒谷氏によれば、認識論と存在論とが交錯する場面でイマージュ概念の意味は見定められなければならず、その場面でこそまた、ベルクソンが観念論と実在論を同時に乗り越えた次第が見届けられるべきなのである。

本論文の第一部はまずアリストテレス以来の存在論がロック以後の認識批判によって超克された事情を確認し、イマージュ論が認識批判の成果を十分に踏まえた後に、しかも経験論よりも徹底して経験に内在しようとするものであったことを主張する。純粋に時間的な在り方において忠実に取り出された真の経験とは「記憶」であり、それを構造化するものは「図式」であることが説得的に明らかにされる。これがいわばイマージュ論の認識論的な側面にほかならない。だが、認識論的なイマージュ論は、まさにそれが認識論的なものであるがゆえに、経験がそこで展開する「私」の存在そのものを置き去りにしてしまう。そこで、本論文は第二部において、まず「私」の身分を認識論の歴史に即して確認し、「私」の存在をめぐる問題が、認識論的な地平においては解きがたい難問を提起することを確定する。それは一言でいって、デカルトがコギトの確実性のためにむしろ神による連続創造を要請し、カントが超越論的な主観の存在を要求した事情と関係しているのである。そのような確認を受けて本論文は、ベルクソンのイマージュ論が、「私」という主体を前提することなく、端的に生起する経験を描き出そうとするものであり、かえって「私」の生成そのものを存在論的に辿りなおそうとするものでもあったことを解明してゆく。

本論文は総じて、位置づけの難しいベルクソン哲学を哲学史の文脈に着床させ、またイマージュ論における認識論と存在論の交錯という正統的な問題を、斬新な視角から解明するものである。解釈の細部にはもとより異論の余地もあり、研究史の踏まえ方にもなお不十分な面が見られるとはいえ、本論文がベルクソン研究の懸案のひとつに果敢に立ち向かい、以後の研究の礎を築こうとするものであることについては疑いを容れない。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。